
コンビニ強盗

鈴木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビ二強盗

【Nコード】

N2196P

【作者名】

鈴木

【あらすじ】

生徒会長の創と麻はサバサバ系カレカノ。いつものようにコンビ二で買い物をしていたら、何とコンビ二強盗が！ここは怖がるどころ！と思ったら、なぜかその場に居合わせた人たちは皆何処かずれている人たちで・・・?!

誰か、今何が起こっているのかを20文字以内で俺に説明してくれ。

【コンビニ強盗】

「金を出せ！」

その一言が店内に響き渡った時、俺と麻はパンを選んでいるところだった。焼きそばパンと、カツサンドの良さ悪さについて彼女と話し合っていたその時に、タイミングよく黒い服を身にまとった20代半ばの男性が入ってきたのだ。その時は、焦るだの怖がるだの、そういった感情は一切なく、ただ何が起こっているのが全く分からなかった。それは麻も同じなようで、初めは彼女もポカンと口を半開きにさせてドア付近の男を眺めていた。強盗らしきその男は周囲が静かになったのを確認すると、靴の音を立てながらカウンターまで行つて、店員に銃を突きつけた。人差し指はレバーに引つかかっている、一言でも逆らったら撃ち殺してやるぞという無言の脅迫が聞こえてきた。

しかし、俺の隣でパンを選んでいた麻は最初こそは驚いたものの、店員が銃を突きつけられたあたりから激変する状況についていけなくなってしまうらしく、遂にはこの状況下で俺に「早く選はない？」と言っているものの天然ぶりを見せつけた。

「いや、今そういう状況じゃないと思う」

強盗様にさっきの麻の発言を聞かれなかったことを願いながら、俺は小声でそういった。しかしそんな俺の頑張りもむなしく、麻はいつもと同じ声量で俺に返事をする。

「そう？ 私たちのほうが先にここに来たんだから、順番的には間違

っていないと思うんだけど」

「そういうことじゃなくて……」

静かにしないと殺されてしまうかもよ、と続くはずだった俺の言葉はほかの人間の怒声によってかき消されてしまった。

「おいそこ、何をやっている！」

俺は、あぁなんということだと思いつながらかけていた眼鏡を中指でカチツと上に押し上げた。男は、右手に銃、左手にレジから無造作に取ってきた札束を持っていて、顔にはよくテレビで見るような強盗犯用の黒いマスクをかぶっている。何というか、すごく不格好だ。

「持っているものを全部床に置け。……早く！」

俺は気づかれぬように深くため息をつく、学校指定のカバンをゆつくりと床に置いた。それからもう一度眼鏡を押し上げ、時計を見て、今日はもう塾には行けそうにないなと思った。俺は毎日3時から塾に通っていて、それまで麻とコンビニに来て時間をつぶすのが日課となっているのだ。しかし時刻はもう2時半。塾まで30分以上はかかるために、今日はもう間に合わない。まあ、1日ぐらい行なくても大丈夫だろう。たぶん。

「おい、お前もだ、そのパンを持っているミニスカの女」

パンを持っているスカートの子といえは俺の隣に立っている麻以外に当てはまるはずがなく、思わず苦笑した。ミニスカの女といわれて自分の彼女が黙っているはずがないと解っていたというのもあったが、本当は彼女が手にしていた蒸しパンが音を立てて袋ごと握りつぶされる瞬間を見てしまったのだから笑うしかなかった。

「お言葉ですが、ひざ上1センチメートルはミニスカと言いません。

それはこちらにいらつしやる生徒会長様が証明してくれますよ。それから、私はパンが欲しいだけなので早く買わせていただけませんか。貴方でいいわ、今のところ店内での権力者は貴方みたいだし、丁度お金も手にしてる。ほら、これください」

そう言つて麻は強盗の元へと歩いていくと、手にしていた蒸しパンを差し出した。強盗は、それを不思議そうに見つめると、眉間にしわを寄せ、顔を赤くさせた。麻との付き合いはもう半年以上になるが、これほど肝の座った女だったのかと改めて感心した。本来ならば「ああ敵を怒らせてしまったぞ」と嘆くシーンなのだろうが、この時俺は妙な事に気が付いてしまい、気づいたときには口を開けて言葉を発していた。

「あれ、結局焼きそばパンはやめたのか？」

その一言が店内中に響き渡り、消え入る。目の前の強盗をないものとするかのように俺は麻にそう聞いた。麻はそれを聞くと、うーんやっぱりあれも捨てがたいのよね、と言つて蒸しパンを元の棚に戻して焼きそばパンを手にとった。

「俺はやっぱり、カツのほうがいいと思う。栄養のバランス的にもお前は少食だから、スタミナをつけないといつか倒れるんじゃないか？」

「そついう会長だつてサラダ日和じゃない？」

「俺はいいんだ、別に動き回らないから」

「模試試験中にぶつ倒れたら洒落にならないと思うんだけど？」

「今日はこの状況だ、塾なんて行けやしないだろう？」

「それも、そうね。じゃあ今日はゆつくり話ができて丁度いいわ」

「いや、待て。俺強盗だぜ？お前らしい加減にしろよ」

麻はうーんと唸ってから焼きそばパンを手に取り、レジのところへ
すたすたと歩いて行った。そして、必要なだけお金をレジ台におい
て、また帰ってこようとした。が、すぐさまレジ担当のバイト店員
に呼び止められた。

「ポイントカードはお持ちですかぁー」

ぼさぼさの髪。

すべてを諦めたようなまなざし。

如何にもやる気のなさそうな表情。

そのレジ担当バイト員は、そう言っただけ麻を呼び止めた。ポイントカ
ードというのはこの店の物ではなく、ある種のパンを買ったものが
ポイントをとめて賞品をもらうという、所謂シール集めに似た制度
だ。シール制度だと、シールだけを剥がして逃げ去る人間がいて商
売にならないと思った菓子パン会社が思いついた「名案」というや
つだ。

「持っていないけど、何がもらえるの？」

「今はミーマインフェア開催中ですので、ミーマインのお皿とかーそ
んなんでーす」

「じゃあ一枚作ってくださいか？」

「あーい……」

全くやる気があるのかないのか、変なところでまじめな奴だなと俺
は思った。普通このような状況で普通に客の注文に受け答えする人
間がいるだろうか。もしいるとしたら、相当な仕事好きか、……た
だのバカだろう。

一気において行かれてしまった強盗はパニック状態に陥り、
「待て、待てよ！動くんじゃねえ！撃つぞ！ほら！ほら！」
と銃を振り回していたのだが誰も相手にする様子はない。

もうどうしてよいか解らなかったのだろう、確かに強盗に入ってこんなに邪魔をされてしまえば自棄を起こしたくなるのもわかる。いや、強盗に入った時から既に起こしていたのかもしれないが。強盗はマスクを外すと興奮した様子で俺と麻に向かって交互に銃口を向けた。マスクをとった彼の第一印象は「好青年」で、ひげもきちんと剃ってある、エリートと言われたら納得できるような顔立ちだった。だから俺は彼を、好青年と名付けた。そのままだ。

「お前ら、いいかげんにしろよ？ この銃には本物の弾が入ってるんだぜ？ お前ら付き合ってるんだろ？ どっちかが死んだら困るんじゃねえ？」

尚も興奮気味に、息を荒げ、目をかっぴらいて好青年は俺にそう言い放った。ついでに弾が入っていることを証明するために、ご丁寧に一発天井に向かってノズルを引いた。体育祭で聞くあの音が、店内に響き渡る。俺は、ああ面倒くさいとばかりに一歩前に出ると、目を細めながらまた眼鏡を人差し指であげた。

「別に付き合ってませんけど」

そう俺が言つと、好青年はきょとした顔になる。

「付き合ってませんよ。彼女はうちの学校の生徒です。麻を撃つのは生徒会長として許せることではないですけどね。」

なんだか本当に相手が可愛そうになってきたのは口が裂けても言えないが、もし俺が神様なら彼にもう一度強盗のチャンスを与えてやりたい。

「付き合っていようが、付き合っていまいが、そこからあと一歩で

も動いたら発砲する！解つたな！」

こんなとき、付き合っている相手が麻で良かったと思う。またねちねちとうるさい様な女子と付き合っていたのなら、後々「私の」と好きじゃなかったの？」等と面倒なことを問われるに違いないのだ。麻は、そういったタイプの人間ではない。付き合つて間もないころは、我慢して居るのかと思ひ色々と氣を使っていた事もあったが、そうではなかったらしい。彼女はそういう事を気にしない、視點を変えた言い方をすれば理解力のずば抜けている人なのだ。勉強も、運動も、人並みもしくはそれ以上にできるし、友人も少なくともない。所謂「理想の像」というやつだろう。

「じゃ、じゃあ！ お前だ！ お前はもうこれで動けない、解つたら金を出せ！ 早く！」

そう言つて好青年が銃口をレジ担当のバイト員に向けた時、コンビ二自動ドアが開いて聞きなれた入店メロディーとともにどすの利いた声が響きわたった。

「黙つて手を挙げる！ それから店員は金を出せ！ 早く！」

（後書き）

昔にかいた小説が出てきたので載せてみました。
この後どうなるのかは皆さんのご想像にお任せします（、、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2196p/>

コンビニ強盗

2010年11月30日11時10分発行